

# 山田道の調査

## —第121次

### 1 はじめに

本調査は、県道榎原神宮東口停車場飛鳥線の改良工事に伴い実施した。調査地は当該県道と明日香村の農免農道とが交差する、奥山交差点の北西部に位置する。この県道改良工事に関連する調査は、1988年以来9次にわたる。うち、県道北側で行われた、第2・3次調査では山田道とは断定できないながら、7世紀末から8世紀前半に及ぶ東西溝SD2540とこれを北側溝とするSF2607を検出、第5次調査ではこのSD2540が雷丘裾部まで達すること(SD2800)を確認、また、第4次調査では、石組溝SD2780を検出している。県道を隔てて南では、第7次調査で7世紀後半には埋まる東西溝を検出、第9次に相当する飛鳥藤原第104次調査では、藤原宮期およびそれ以前の掘立柱建物や土坑と、古墳時代後期・7世紀初頭～前半の土器を含む南北溝SD3880などが検出された。今回は調査区を4か所設定し、西から順にⅠ～Ⅳ区とした。各トレンチの規模は、Ⅰ区が15×12m、Ⅱ区が13×9m、Ⅲ区が2.5×7m、Ⅳ区が2×4mである。

### 2 検出遺構

各調査区の基本的な土層は、Ⅰ区では①盛土(厚さ60cm)、②旧耕土・床土(厚さ30cm)、③橙褐色土層(厚さ35cm)、④灰色砂粘土層(厚さ10cm)、⑤暗褐色粘土層(厚さ20cm)、⑥暗灰色粘土層(厚さ50cm)、⑦褐色腐植土層(厚さ25cm)、⑧青灰色シルト層(地山)、Ⅱ区では①盛土(厚さ80cm)、②旧耕土・床土(厚さ50cm)、③橙褐色土層(厚さ10cm)、④灰褐色粘質土層(厚さ40cm)、⑤暗灰～灰黒色粘土層(厚さ80cm)、⑥暗青灰色粘土層(厚さ40cm)、⑦青灰色砂粘土層(厚さ30cm)、⑧青灰色粘質砂層(地山)、Ⅲ区では①盛土(厚さ70cm)、②旧耕土・床土(厚さ20cm)、③紫灰褐色粘質土層(厚さ20cm)、④暗灰色粘土層(厚さ20cm)、⑤暗灰色砂粘土層(厚さ20cm)、⑥灰色粗砂層(厚さ20cm)、⑦青灰色粘質土～シルト(地山)、Ⅳ区では①盛土(厚さ20cm)、②旧耕土・床土(厚さ70cm)、③紫灰褐色粘質土層(厚さ25cm)、④暗灰色粗砂層(厚さ15cm)、⑤明褐色砂質土層(地山)である。

検出した主な遺構には、沼状遺構、弥生時代の流路、

水溜、東西溝、井戸、土坑、小穴や中・近世期の耕作に伴う小溝などがある。

Ⅰ区では水溜1基と沼状遺構および弥生時代の流路1条を検出した。水溜SX4001は④層に埋没していた。湿地状の場所に、直径約45cmの円形曲物を設置したもので、残存高26cm。内部に礫を充填した上で廃棄された。廃棄の時期は8世紀以降であろう。④層以下は粘土質の堆積土が続き、平坦な底面となる地山直上には褐色の腐植土(⑦層)が堆積しており、深さ約1.7mの沼状を呈する。沼状遺構SX4008は、調査区南西隅で南西岸の一部を確認しており、このあたりから北へ広がっているものと推定できるが、規模は不明である。弥生時代の流路SD4005は、沼状の堆積土を除去して⑧層上面で検出した。現地表面から約3m下である。幅2.6m、深さ約0.5mあり、調査区対角線上を南東から北西に向かって流れる。埋土は上層が灰色の粗砂、下層が青灰色の粘土で、中～後期の土器を含む。SD4005は、東肩が西肩より約30cm低くなっており、埋没後に大きく削平を受けたようである。沼状の堆積土⑤・⑥層に7世紀前半の土器が含まれ、⑦層にも7世紀の土器を少量ながら混入し、洪水の形跡もないところをみると、7世紀前半以降より前に弥生時代の流路を切って付近一体が大きく開削され、沼状のSX4008になったと考えられる。そして、7世紀前半以降徐々に埋没し、上部(④層相当)は8世紀以降も湿地状を呈しつつ、平安時代以降完全に埋没したのであろう。この上部層は、灰色砂を含み、後述する東西溝SD4000に関わる可能性がある。

Ⅱ区では④層上面で、東西溝1条、井戸1基、小溝13条、土坑3基、小穴11基などを検出した。東西溝SD4000は調査区南辺で検出し、南岸は未確認であるが、幅2m以上、深さ0.4mある。北岸には人頭大の花崗岩1石が内部に残る溝状の掘込が認められ、護岸施設の痕跡(SX4010)と考えられる。この掘込と溝内には灰色の砂層が堆積し、出土土器などから9世紀以降に埋没したとみられる。おそらく、護岸の石列が抜けた後も溝としてしばらく機能し、やがて護岸部ともども灰色の砂層に覆われて埋もれたのであろう。なお、溝埋土から和同開珎2点が出土した。井戸SE4006は方形隅柱横棧留縦板組式で、数枚から10枚程度の縦板を柱および横棧と掘形との間に差し込むだけの簡素な構造である。柱は10cm角は

どの四角柱ないし六角柱である。掘形は1辺1.2～1.3m、残存部の深さが1.2mあり、上部を抜き取った跡が認められるので、井戸枠はもう少し深かったものと考えられる。地下からの湧水がほとんど認められないので、雨水を貯めておく野井戸であろう。井戸枠内埋土からは桃の種、木炭等のほか9世紀代の土器が出土しており、9世紀以降SE4006は埋没したのであろう。小溝は幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mの小規模なものが縦横に交錯しており、土器片等がわずかに出土したのみで、時期比定は困難であるが、おそらく中・近世以降のものであろう。土坑と小穴は、土器片等がわずかに出土しているが、いずれも時期は不明である。小穴は建物としてまとまるものはない。

Ⅲ・Ⅳ区では、それぞれ地山面上に掘り込まれた東西溝1条を検出した。調査範囲が狭小なため、各々の両岸を確認することはできず、規模は明かでない。これらとⅡ区で検出した東西溝SD4000を比較すると、いずれも埋土が灰色の砂層ないし粗砂層であること、流れの方向が一致すること、Ⅳ区では溝の底部が2条に分かれて護岸部らしき様相も窺えることなど、SD4000とⅢ・Ⅳ区の溝とで一致する要素が少なからず認められるため、これらは一連の溝と考えてよいであろう。この東西溝SD4000はⅣ区を越えてさらに東へ延びる。また、西のⅠ区周辺では東西溝として明確に捉えることはできず、最終的には北へ広がる湿地帯へと流れ込み、それと一体となっていたようである。

### 3 出土遺物

主な出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・製塩土器等の土・陶器類、瓦、サヌカイト製石鏃等の石製品、ガラス溶解埴塼等の土製品、和同開珎や鈴等の金属製品、井戸枠部材や斎串等の木製品、獣骨・種子などの動・植物遺存体などがある。

瓦は非常に少なく、丸瓦10点(1.0kg)、平瓦13点(2.3kg)がそれぞれ出土した。7世紀代の瓦が少なく、奈良時代のものが多い。

流路SD4005からは、上述のように中～後期の弥生土器、サヌカイト剥片、砥石などが出土し、他に包含層等から太型蛤刃石斧、サヌカイト製の石小刀や同じく石鏃などが出土した。

ガラス溶解埴塼は小片1点のみであるが、Ⅰ区のSX4008堆積土である⑤層から出土したもので、断定はできないが、同層出土土器からみて、あるいは7世紀前半にまで遡るであろう。

和同開珎2点はいずれも、Ⅱ区SD4000灰色砂層から出土。遺存状態は良好で、銭文は新和銅に属する。1点は径2.45cm、重量約3g、他は径2.60cm、重量約2.5g。鈴はほぼ完形で銅製、漆塗り。内部には鉄丸を入れる。径約2.2cm、重量約4g、SX4008の上部層から出土しており、奈良時代以降のものか。また、SX4008の上部層出土品に、用途不明の有孔石板がある。紐がかかるように、孔の外側に当たる側面を浅く抉っている。半截しており、長さ約15cm、重さ約870g。

斎串は、SE4006井戸枠内埋土から10点出土した。同層出土土器からみて、9世紀代のものであろう。

## 4 まとめ

今回の調査では、石組みで護岸する幅2m以上の東西溝SD4000を検出できた。調査区西端にあたるⅠ区では、この東西溝を明確に認めることはできなかったが、この溝が、一部で形状が不明確となりながらも西へ続くとなれば、山田道第4次調査東区で検出した石組溝SD2780に連なる可能性がある。そうであるとすれば、今回調査区とあわせて、その延長は約100mに及ぶこととなる。この第4次調査では、やはり石組溝の西端が不明確で、西区では調査区全体が北へ向かって傾斜し、そこに砂が堆積している状況が確認されており、今回のⅠ区調査結果と共通する点が見受けられ、このことも両石組溝の関連性を考えさせる事実である。

SD4000は、9世紀以降に埋没したことが今回の調査で確かめられたが、上限については今のところ、7世紀前半以降としか言えない。これが古代の山田道に関連する遺構であるのかどうか、その性格を明らかにするにはなお検討を要するが、7世紀前半以降のある時期に、幅2m以上の溝が現県道の北側の位置で、東西に長く延びていたと言えるのではなかろうか。

SD4000の発見は、弥生時代中～後期に遡る流路の検出とともに、狭小な発掘調査範囲ながら重要な成果であるといえよう。

(小池伸彦)

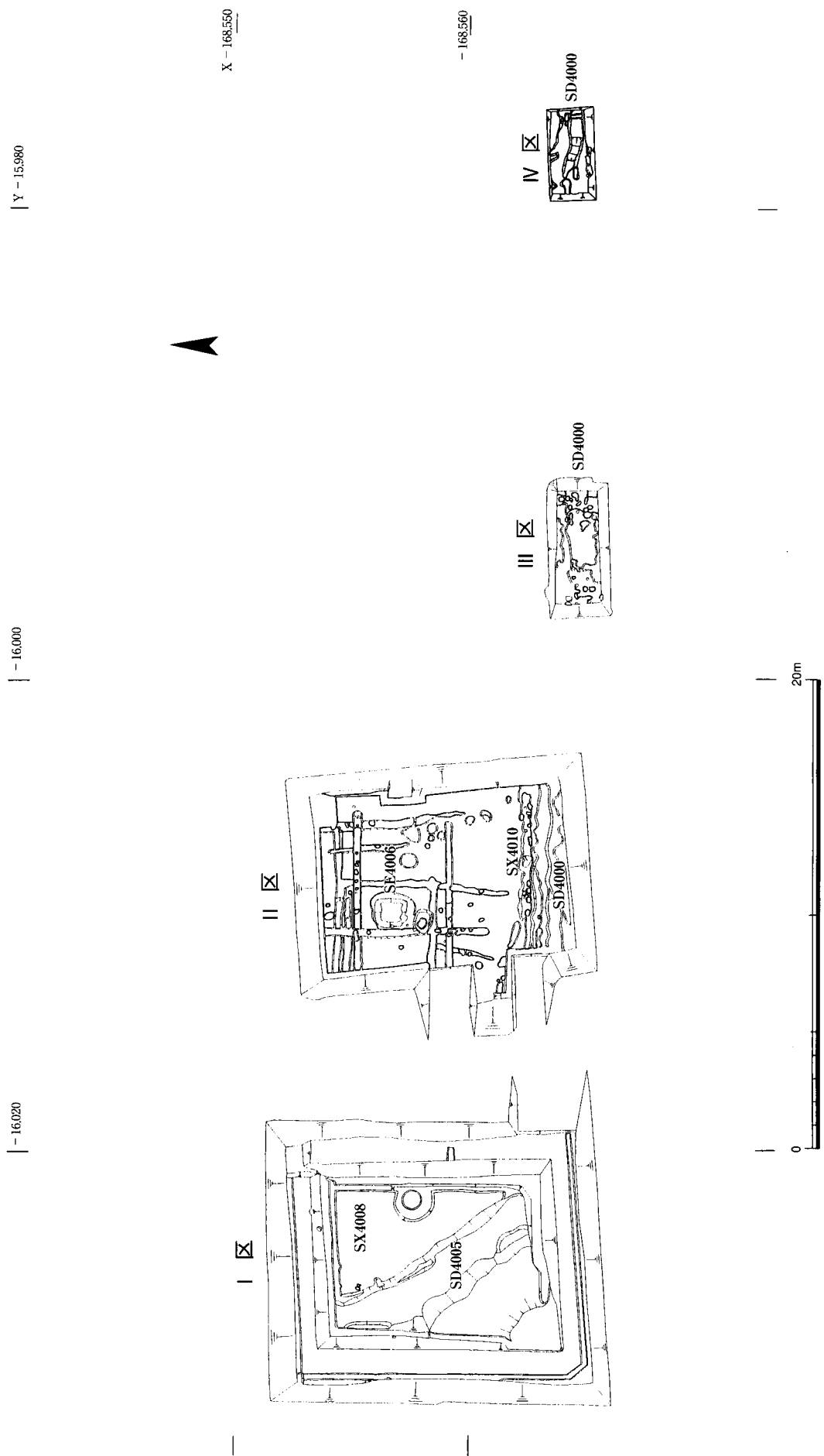


図108 第121次調査遺構図 1:250